



子どもの新年外四首

ま
う
へ

子どもの新年

小指折りまちわぶる子らの新年を

むかへてやがて何求むらん

親の新年

新年をいさみ迎ふる子らの爲に

今年の幸をまづ祈るかな

新年

しばらくは池にひそめる龍の子の

天かけり行く年は來にけり

教の道

蔭かぬ種の生えむものは人の子の

教の道もおなじとぞ思ふ

爐邊閑讀

おもふどち語らひ居れば埋火の

にほうあたりは冬としもなし

割烹十二月 (むつぎ)

石井泰次郎

一月の料理には、名のめでたきを以て、第一となすが今も流行なり、屠蘇の昔すぎたる、饅餅の今様なるも、だいたい、かちどり、梅ぼし、

柑子、こんぶ、野老、海老、齒菜、ゆづり葉の

搔敷の上にづらねて、ことほぎの料とするは、

昔今の料理法のいづれにも偏せぬなるべし、右

のうちの原料を以て料理れる料理法あり

◎結昆布、ムスピコンブはムツミヨロコブとの意

にて用ふるとかや

昆布の青さを、水に浸し置て、洗ひて、湯煮して

取りあげて、切方して、結びて、砂糖、醬油にて

煮染て用ふべし、結やうは玉章の如く、一つむす

びにすべし

◎鯨鱈、子孫繁昌によそへて用ふるとかや

數の子の料理法は、冬春の内にと、のへて、客に

も出すなり、あへもの、あんかけなどにす、數の

子を水にて洗ひ、水に二三日漬わくうち、水度々

かへてよし、かくて能くふやけたる後に、色々に

用ふべし、能く水氣をさりて布にてふきて、から

し酢みそにて和て用ふべし（ねりみそに、からし

と酢とを加へて煉りたるを辛子酢味噌といふ）又

水をきりて、水をぬぐひて、醬油のよろしさに漬

て、能く漬たる時、皿にとり分て、上より花かつ

をを振かけて進むべし（花かつをとほ鯉節を小刀

にて極めて薄く細く削りたるをいふ）又水をさり

て、水にて洗ひて、煮え湯へ漬て、湯を切て上よ

り葛だまりをかけて、上に山葵をふるして少し置

て進むべし（葛溜とは、葛あんにて、かつを煎汁

の汁へ、味淋と醬油を合せ煮かへしたるに、葛粉

を水にてときたるを入れて「入る、時、片手に持

子を持つて鍋の内をかきまぜるべし」あんにつく

る）味のあまさから好によるべし、又葛あんを

かけだして煉味噌をつくりてかくるもよし

◎小殿原 田作とも云ふ、ゴマネ鱒の事なり、ゴ

まめ又は、田作の名を以て用ふるとかや

普通の料理法は、かしらと腹とを一度にはす切に

取りて、焙燥にて能く炒りて、手にてもみて粉を

おとし、扱湯を煮かへしたるに漬て、後に味淋と

砂糖、鹽などにて味をつけて煮るべし、又いりた

るまゝなるを、味淋と醬油を同位に合せて煮かへ

したる、てりの中に、いりたてを入れてかきまぜ

て用ふ、又湯につけたるを細くさきて、白髪大根

に合せて酢の物にして用ふべし

◎開午莠 ひらくと云ふは祝の心にて、皿の上に

ひらきて盛る故にいふとかや

午莠、梅田午莠とてふとき午莠あり、この時は、

よく土をあらひて、輪切で五六分に切て、湯に入

れて、煮る事、二時間して、後にかつを煎汁を以

て、煮るべし、味は砂糖と醬油少しとを以て煮る

べし、又味淋を入れるれば一段とよし、又午莠を細

く長く切りて、米をとぎたる三番位の水に入れて

よくさらし、水氣をよくさりて、胡麻の油にてあ

ぐることあり

◎穗俵 ホンダワラともいふ、神馬藻の名によつ

ても用ひ、ほんだわらといふ名によりて用ふると

かや、正月の春盤にかゝず置物なり、俗に穗俵本

俵と書したり料理法は、水にて洗ひて、湯煮して

さしみの取合せか、又はからし味噌あへにして用

ふべし

◎倭海鼠 とらごともいふ、生海鼠なり、申海鼠

煎海鼠などあり、生は秋のものとする、

申海鼠の料理法は、水につけ、湯煮する事一晝夜

以上して、後にあとさきを切て、腹をわりて中の

砂をよく洗ひさりと、煎汁、味淋、鹽にてやわらかに煮びたして、其まゝ茶碗にもり、砂糖をかけて進む（水には二日以上つけおくべし、煮るに砂糖を用ふれば、のちに砂糖かけずともよし、砂糖は、ザラメ砂糖を紅にてそめて用ふべし

（附録）
料理覺帳

◎料理の二字は、はかりをさむるとよみて、食物を調ふる事ばかりに限らず、何事にも取計らひ調ふる事をいふなり、食物を調ふるを、料理すと云ふも、右の心なり、本は食物を調ふる事をば、庖丁するとも、調味するとも云ふなり、あんぱいと云ふは、鹽梅の二字なり、上古は味噌醬油も醋もなし、鹽と梅を以て味を調へたる故、鹽梅といふなり

◎餅の事を女の詞に、かちんと云ふは、かちいひ

なりかちは搗の字なり、うつともつくとも、よむ字なり白杵にて物をつく事をかつといふなり米麥などをつくを米かつ麥かつなどいふなりいひとは飯なり、こはいひをつきて餅にする故かちいひと云ふなり、かついひを略して、かちいと云ひ、かちいを轉じてかちんと云ふなり。

婚姻の性質

谷川 清

婚姻と云ふ字義は本來夫妻たる關係自体を表明する用語であると云ふことは第三卷第三號に述べて置きました、其關係の性質に就きましては學者間に種々様々の議論があります、其議論の原因と申しますものは婚姻は男女の共諾に因りまして成立致すものであると認められました結果、之